Japanese Association for Religious Studies

ゾーンのチベット仏教が見せる文化的資源性を、特定の僧院を事例としてさらに詳細に検討していくことで、現代チベット仏教が持つグローカルな動態の一端を明らかにできると考える。

シェンラブ伝に於ける孔子の位置

津曲　真一

チベットの宗教文献には屢々、古代中国の思想家・孔子に比定されるコンツェと呼ばれる人物が登場する。古代チベットに於いて孔子は、孔夫子の音写と思われるクン・プー・ツィ（khung phu'u tsi）、あるいはクンツェ（khung tse）の名で知られていたが、これが次第に転訛し、彼は後世の文献中でコンツェ（kong rtse）という名で呼ばれるようになる。本来、チベット文化とは異なる文化に属するコンツェは今日、チベット文化域において広く行われるト（gto）と呼ばれる避禍招福の儀礼や、ナクツィ（nag rtsis）と呼ばれる占星術に関する文献の中に登場する。また彼の名は、チベット語で「幻術の王」を意味するトゥルギ・ギェルポ（'phurl gyi rgyal po）という呼称を伴うことが多い。

コンツェに関する表象は仏教徒とボン教徒の間では大きく異なっている。トゥカン・ロサン・チューキ・ニマ（一七三七―一八〇二）、ダライラマ五世（ngag dbang blo bzang ryga mtsho 一六一七―一六八二）等の手に成る仏教伝統に属する諸文献に依れば、コンツェは中国の五台山において文殊菩薩から占星術の技術を授与された存在であるか、或いは建築の技術に秀でた人物であったと伝えられる。一方、ボン教伝統では、コンツェは占いの儀式執行中に瞑想の中で呼び起され、儀礼執行者に吉兆を伝える超自然的な存在とみなされており、また同宗教伝統の聖者であるシェンラブ・ミゥ（gshen rab mi bo）の伝記によれば、コンツェは熱心なボン教信者であったと伝えられている。同伝記に依れば、コンツェはガプツェ（gab tse）と呼ばれる占星術のための計算図表を掌に持って誕生し、成人して湖上にボン教寺院を建設した後、シェンラブに帰依し、自身の娘をシェンラブに与えて親族関係を結んだとされている。この他、同伝記には敦煌文書に含まれる所謂『孔子項橐相問書』に見られる孔子とその師と伝説される少年の対話と類似した物語が挿入されており、チベット文化における孔子の受容のあり方を見るうえで極めて興味深いものとなっている。

本発表ではコンツェとシェンラブの事績を描いた宗教画を参照しながらシェンラブ・ミゥ伝に於けるコンツェの描写を概観し、ボン教と異文化の接触のあり方について検討した。

ナオジョテから見たパールシー・コミュニティ

香月　法子

ナオジョテとは、先祖代々ゾロアスター教を信奉するパールシーにとって、パールシーであれば遅くとも十五才までには受けなければならない、伝統的なゾロアスター教への入信儀礼とされている。全てのパールシーが受けることが当然であり、寺院内の浄化儀礼などよりもパールシー一般にとっては、もっとも馴染みのあるゾロアスター教儀礼である。

しかしゾロアスター教の儀礼として、その成立過程を追って

NII-Electronic Library Service